『人間と仲良くなった鬼』

脚本　宇都宮みどり
絵　志村弘昭

（一）

山奥に、鬼たちの　住む　小さな村が　ありました。

鬼1　「ゴロゴロ石の　ころがる　この　やせた土地では　うまく
野菜が　育たないなあ」

鬼2　「子どもたちにも　腹　いっぱい　めしを　食わせて　やりたい
もんだなあ」

鬼3　「イノシシも　そうそう　つかまえられないし。
あーあ、それにしても　腹が　へったなあ」

グー　ギュルルルル

鬼たちの　お腹が　大きな　音を　出しました。

（二）

一月も終わりの　ある日のことです。

おじい鬼　「お前さん、どこから　来たんじゃい？　この辺じゃあ、見かけねえかお　じゃが」

村一番の　年よりの鬼が　見知らぬ　男の子の鬼を見つけて　聞きました。

豆の子太郎　「あっち」

おじい鬼　「名前は？」

豆の子太郎　「豆の子太郎！」

おじい鬼　「お父さんや　お母さんは？」

豆の子太郎　「知らねえ」

（三）

おじい鬼　「かわいそうになあ。腹も　へって　おることじゃろう。

よし、うちに　おいで」

豆の子太郎　「ありがとう」

おじい鬼　「すまんなあ。こんなものしか　なくて。これじゃあ　腹いっぱいには　なんねえなあ。人間の　村では、食べ物が　いっぱい　あるらしいから、分けてもらえると　助かるんじゃが、わしらを　こわがって　おうても　くれん」

おわんの　なかには　うすく切った　大根と　人参が　二切れ浮いているだけです。

豆の子太郎は、それを　見ながら　何か　考えているようでした。

（四）

翌朝、おじいが　起きてみると　豆の子太郎の　姿が　みえません。

おじい鬼　「一体、どこへ行って　しもうたんじゃろう。外は　寒いじゃろうに」

そんな　おじいの　心配をよそに　豆の子太郎は、昼過ぎに　ニコニコしながら　帰ってきました。

豆の子太郎　「じいちゃん。節分って知ってるかい？」

おじい鬼　「人間が『鬼は外　福は内』と言いながら、豆をまくと　聞いたことが　あったような」

豆の子太郎　「それそれ。人間はね、鬼のお面を作って、それをかぶって　鬼になるんだよ。それなら、ほんものの　オレたち鬼が　やった方がいいだろう？」

おじい鬼　「そりゃそうじゃが、人間どもは　わしらを　こわがって　おるでのう」

（五）

豆の子太郎　「おいら、村へ行って　話をしてきたよ。『山の奥に住んでいる鬼たちは、人間をおそったり、食べたりなんか　しないよ。みんなと　おなじ　畑を　いっしょうけんめい　たがやして　くらしてる　やさしい　鬼たちなんだよ。だから、節分にお仕事させてくれない？　お礼は　あまってる　お米や　野菜でいいよ』って」

おじい鬼　「なんとまあ。人間どもは　お前さんを　こわがらなかったかい？」

豆の子太郎　「おいらが　子どもだからか　こわがらなかったよ」

おじい鬼　「それで？」

豆の子太郎　「村長さんが、村人を　集めてくれて　話をしてくれたんだ。それで、おいらを　信じてみようと　いうことに　なったのさ」

おじい鬼　「なんと　まあ」

（六）

おじいは　さっそく　村の　鬼たちを　集めました。

おじい鬼　「この　豆の子太郎のおかげで　仕事が　できたぞ」

鬼たち　「おお！　そりゃ　うれしいのう。それで、どんな　仕事かのう」

おじい鬼　「節分に　人間の村に行って　豆を投げてくる　人間に
『もう　悪いことはしません』と言って　逃げまわるんじゃ」

鬼1　「へん。なんで　悪いことも　してないのに　あやまらなくちゃ
いけないのさ」

おじい鬼　「芝居じゃよ、芝居。それで　食べ物がもらえるんだったら
お安いご用じゃないか」

（七）

節分の日になりました。

鬼たちは、ドキドキしながら　人間の村に向かいました。

村人１「あっ、鬼だ！」

村人２　「角が一本の鬼も　二本の鬼もいるよ！」

村人３　「赤い鬼も　青い鬼もいる！」

村人３「見て見て！　おじいちゃんの　鬼もいるよ！」

村人４「あんまり　恐そうじゃないね」

村の子どもたちも　大人たちも　大騒ぎ。

村に着いた　鬼たちは　それぞれ　持ち場の家に　向かいました。

（八）

豆の子太郎が　行ったのは　村一番の　貧しい家でした。

女の子　「母ちゃん、みんなに　豆、分けてもらえたよ」

母親　「良かったねえ。千代には　初めての　豆まきだねえ」

女の子　「鬼、早く　来ないかなあ」

豆の子太郎　「わおぉ。鬼だぞぉ。鬼が　出たぞぉ」

豆の子太郎は、こわい声を出して　飛び出しました。

女の子　「きゃーっ！　鬼だ」

母親　「さあ、早く、千代。あれを　言わなくちゃ」

女の子　「鬼は外！　福は内！」

千代は、力いっぱい、豆の子太郎に、豆を　ぶつけました。

バラバラ　バラバラ

（九）

豆の子太郎　「うわぁ。助けてくれぇ。もう、悪いことは　しません」

そう　言いながら　逃げていた　豆の子太郎でしたが……。

豆の子太郎　「なんて　おいしそうな　豆なんだ！」

豆の子太郎は　がまんできずに　大好物の豆を　全部ひろって

食べてしまいました。

女の子　「どうして　豆を　食べちゃったの？　あとからひろって　今夜の

おかずに　するはずだったのに」

女の子は、大粒の　涙をこぼしました。

豆の子太郎　「ご、ごめんよ。おいしくて、つい　食べちゃった」

（十）

豆の子太郎　「村長さん、おいしくて　おいら　つい　女の子がまいた豆を
全部食べちゃったんだよ。女の子に　あげる食べ物、
何か　ないかなあ」

村長　「わっはっはっは。豆の好きな鬼とは　こりゃまた　おもしろい。
よし、これを　もっていって　おやり」

村長さんは、女の子のために　大根一本と　お米一袋を　豆の子太郎に
渡しました。

（十一）

豆の子太郎　「村長さん、女の子、とっても　喜んでくれたよ。ありがとう」

村長　「お前さんは、優しい鬼だね。他の　鬼たちも　礼儀正しかったよ。
どうだろう。これから　ずっと　お前さんたち　鬼に　村の畑仕事や
力仕事を　手伝ってもらうわけには　いかないかね。
お礼は、米や野菜で」

（十二）

こうして　鬼たちと人間は、一生懸命　畑仕事をしながら
いつまでも　仲良く　暮らしたということです。
ほら、聞こえてくるでしょう？
ザック　ザック　畑を耕す音と　鬼や人間たちの　笑い声が。